

創価大学

[SOKA UNIVERSITY]

VUCA時代に 新たな価値を創造する 人材の育成を目指し、 教育改革に取り組む



ラーニングcommons“SPACe”での外国語によるセッションの様子

創価大学は、創立以来、「価値創造教育」を理念として掲げてきた。そして、現在も、グランドデザイン2021-2030に基づき、時代に即応した価値創造教育を実践するための改革を推し進めている。その改革の具体的な内容はどのようなものなのか、また、一連の価値創造教育を通してどのような人材が育ってきたのか、西浦昭雄副学長と卒業生に話を聞いた。

取材・文／伊藤敬太郎 撮影／竹田宗司(西浦副学長写真)

文理にまたがる8学部10学科を擁する総合大学(図1)である創価大学は、2010年代、看護学部、国際教養学部といった新学部創設やグローバル化の推進(「スーパーグローバル大学創成支援[以下、SGU]」の採択、その後の評価で、2回連続最高評価「S」を獲得)など、時代に即応した改革を積極的に進めてきた。そして、現在、同大学は、「価値創造を実践する『世界市

民』を育む大学」をテーマに掲げた「グランドデザイン2021-2030」(図2)に基づき、さらなる教育改革に着手している。同大学は来るべき時代をどのように捉え、それに対してどのような人材を育成しようとしているのだろうか。西浦昭雄副学長は次のように答える。

「世界はこれまでの前提が通用しないVUCA時代(変動的で不確実で複雑で曖昧な時代)を迎えています。これに対応して、OECDは『Education2030』において“学習者のエージェンシー”を提唱し、変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力を養うことの重要性を示しました。本学としても、こうした時代の流れを受けて、これからの社会に生じるさまざまな課題の解決に主体的に立ち向かえる人材の育成が大切だと考え、そのための教育改革を進めています」

グランドデザイン2021-2030のテーマとして「価値創造の実践」を強調しているのもそのためだ。国内外で、社会問題の領域からビジネスの領域まで、多

経済学部教授
キャリア委員会委員長
西浦昭雄副学長

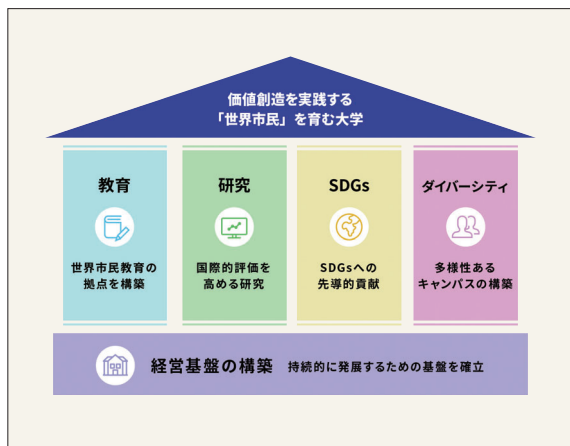
様な問題が噴出しているなか、今、時代は、それらを解決し、新たな価値を創造できる人材を求めている。創価大学は、それを踏まえて、求められている価値とは何かを追求し、それを実践できる力を養うための教育に取り組んでいる。創価大学が教育の柱として重視しているのは図3に示した4つだ。

「一つ目が『論理的に考え、表現する力』です。まず語学力がその一つとして挙げられます。例えば、TOEICテスト®に関しては、730点以上の取得者を表彰する制度なども設けていますし、実践的な力を養えるよう、“SPACe”というラーニングcommonsでは、そこでアルバイトしている外国人留学生と10カ国語で会話できる環境を整備して

図1 創価大学の学部・学科構成

経済学部	経済学科
経営学部	経営学科
法学部	法律学科
文学部	人間学科
教育学部	教育学科
	児童教育学科
国際教養学部	国際教養学科
理工学部	情報システム工学科
	共生創造理工学科
看護学部	看護学科

図2 グランドデザイン 2021-2030



います」

同時に、「日本語で伝える力」の養成も重要なポイントだ。2014年度から「学術文章作法」という科目を全学必修化。1年次から段階を追って論文の書き方をトレーニングすることで、論理的に考え、それをわかりやすく学術的に正しかたちで表現する力を磨いていく。

「二つ目の『他者と協働する力』に関しては、8割以上の授業でアクティブ・ラーニングを実施。このほか、国際寮を含む学生寮など課外での協働の機会が多いのも本学の特徴です。また、三つ目の『世界市民教育』は本学が教育目標としているところであり、2018年度からは、平和、人権、環境、開発、リーダーシップ、サービスマーケティングといったテーマについて学べる全学共通科目である世界市民教育科目群を設けました」

そして四つ目が『問題解決力』。この点に関しては、現代の諸問題の解決には、データを読み、分析し、その結果を活用する力が文理を問わず重要だと捉え、2022年度から「データサイエンス入門」を全学必修としている。

そして、これら4つの柱を踏まえて、創価大学が新たに取り組んでいるのが副専攻の設置だ。一つは2019年度から設けられている「データサイエンス副専攻」。統計学、プログラミングの基礎から応用、さらにはAIの活用法までを体系的に学べるプログラムだ。また2023年度からは「SDGs副専攻」がスタートする。

こちらは各学部がそれぞれの専門分野と環境・開発などのテーマを関連づけて設置した科目と共通科目から自分の興味や目的に従って選択・履修が可能。学生は学部を問わずこれらの副専攻を2年次から登録でき、それぞれ所定の

24単位を修得すれば修了となる。

「SDGs副専攻は、現実の諸問題に関する知識の習得はもちろんですが、それを学生の行動につなげることも重視した教育を行います。また、副専攻に登録した場合は、自学部のSDGs科目だけでなく、共通科目や他学部のSDGs科目を履修することになりますので、幅広い視野を養うことができるでしょう」

副専攻によって二つ目の専門性を身につけることは現実の問題の解決にあたって大きな強みになる。例えば、法学部の学生がデータサイエンス副専攻を履修することにより、データで問題を分析し、法学の専門性を活かして解決策を探るといったアプローチも可能になる。同様のことはSDGs副専攻にも言える。例えば、理工学部の学生が、副専攻で現実には起きている環境問題に関する理解を深め、学部の学びによってそれを解決するための技術開発に取り組むといった貢献も可能になるだろう。加えて、創価大学では、経済・

経営・法・文・教育・理工の6学部の学生を選抜対象として、約30名の少数精鋭で英語や数理能力、課題発見・解決能力などの世界水準の教養を習得できる「GCP（グローバル・シティズンシップ・プログラム）」、キャリアセンター主催で「Global」「Leader」の二つをキーワードに、グローバルリーダーとして社会を牽引する人材を育成するための課外講座「GLC（グローバル・リーダー・カレッジ）」など、グローバルプログラムが充実。このほか、1・2年生を対象としたビジネスコンテスト「SHINE」などもあり、社会で必要な力を養い、試すためにチャレンジする機会が豊富に設けられている。もちろん海外留学もその一つ。SGUに採択された同大学は支援制度も充実している。

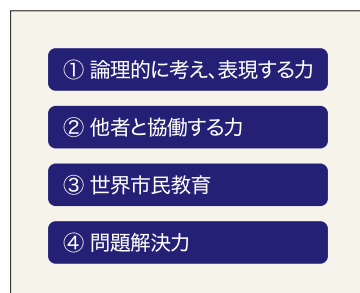
一連の教育は、まさに「価値創造を実践できる人材」の育成という目的に集約される。現在もリアルタイムで改革を続けているが、創価大学は創立以来一貫して「何のために学ぶのか」を考えさせ、そのための主体性と実践力を養う教育に取り組んできた。目的意識と実践力を兼ね備え、主体的に行動できる人材こそが現実の価値創造に貢献できる。次に紹介するような卒業生の活躍は、まさにそれを証明していると言えるだろう。

図4 データサイエンス教育が文部科学省の認定を受ける



創価大学のデータサイエンス副専攻は、文部科学省が推進する「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」。同大では「リテラシーレベル」「応用基礎レベル」の二つの認定を受けている

図3 教育の4つの柱



大学時代に考え抜いたビジョンが今のキャリアにつながっている

民間企業、米大学院を経て
現在はIMFで勤務

学生時代からもともと国際協力の分野で働きたいという思いがありました。経済学部出身で、なかでも女性の経済参加や金融アクセスに関心を抱いていたので、関連する国際機関で働きたいと思っていました。一方で、民間での経験も重要だという話も聞いていたので、卒業後はゴールドマン・サックスの日本法人に就職し、4年半勤めました。国際機関で働くには基本的には修士号が必要なので、その後は米国のジョンズ・ホプキンス大学大学院で国際開発を学び、現在はIMFで働いています。IMFでは融資プログラムを担当する部門で、経済危機に陥っている加盟国に対して新たな融資プログラムを立ち上げるためのデータ分析などの仕事に携わっていま

す。特にここ数年はコロナ禍やロシアのウクライナ侵攻などで国際協力の重要性が増してきているなか、直接的に加盟国の経済発展に貢献できる今の仕事には大きなやりがいを感じています。

今のキャリアを実現できたのは、やはり創価大学での学びが大きいですね。入学当初から、大学は夢に近づくための準備をする場所だと考えていたので、「やれることは全部やろう」という意気込みで、課外プログラムなどにも積極的に取り組みました。GCPとGLCには両方参加しています。GCPは英語力や論理的思考力などのアカデミックな力を徹底的に養えるプログラムでした。ここで得た力は海外大学院への進学にも役立ったと感じています。GLCでも同様の学びはありつつ、グローバルリーダーとしてのマインドセットを養うことにつながったと感じています。正規の授業のほかに



IMF
(国際通貨基金)
リサーチアナリスト
2016年経済学部
卒業
岩城貴子さん

課外授業にも取り組むのは大変でしたが、共に学ぶ仲間がいたことが励みになりました。その後の海外留学も含めて、自分自身を成長させる経験になったと思います。また、GLCでは卒業生のメンターがつき、自分自身のビジョンや卒業後のキャリア、さらにそのために学生時代どう過ごすのかを一緒に考えてくれたことが大きかったですね。何度も対話し、考えることを繰り返すなかで、漠然としていたビジョンや目標が徐々に明確になっていきました。その経験は私の現在に確実につながっています。

大学での多様な挑戦を通して殻を破り大きく成長できた

コンサルタントとして
企業のDXをサポート

大学卒業後は日本IBMに就職し、戦略コンサルタントとして、日本を代表する大手企業のDXをメインとした変革と挑戦をサポートしています。入社2年目なのですが、プロジェクトリーダーを担当。日本経済にも影響を及ぼしうる、企業にとっては10～20年に一度というレベルの大変革に関わることに日々面白さとやりがいを感じています。

大学入学時点では、特に将来やりたい



日本IBM
IBMコンサルティング
コンサルタント
2021年経済学部
卒業
佐藤誠一さん

いことはありませんでしたが、創価大学の世界市民を育む環境や、自分以上に私の可能性を信じてくれる周囲の人たちの影響で自分が大きく変わっていききました。最初の変化をもたらしたのは、1年次に参加した経済学部のIP（英語で経済学を学ぶプログラム）です。留学志望の同期が数多く学んでいたのも、それが刺激になり、留学に関心をもつようになりました。また、シンガポールへの短期研修は海外で働くことに魅力を感じる大きなきっかけでした。

その後、GLCやゼミ、SHINEへの参加、米国への留学など、さまざまな経験を重ねていきましたが、その一つひとつが自分自身を成長させてくれるものでした。GLCでの「何のために学ぶのか」という目的観を深める講座をきっかけに「将来は社会課題を解決し、世界の人々に貢献するリーダーになりたい」と

決意するようになりました。その後は、そのために何が必要なのかを考えて学ぶことができるようになったと思います。

もともと引っ込み思案で変化を恐れる性格だったのですが、学びを重ねるなかで自分が大きく変わっていくのを感じました。常に目標を立て目指す習慣がつき、そのために必要な考える力や伝える力、他者と協働する力、そして自信が培われました。また、創価大学では先輩が後輩を応援しサポートする文化があり、GLCやゼミでは社会で活躍される先輩方のおかげで視座を高められました。その積み重ねがあったからこそ、何事にも揺るがない自分になることができました。

今後は、コンサルタントとして問題解決力を磨き、20代のうちに海外に拠点を移して、グローバルな舞台で課題解決に取り組む仕事に就くことが目標です。